

# 在宅療養者における食支援を通じた健康推進事業 研修会報告

- 1.基調講演「これからの在宅医療」～在宅医の立場から～  
講師：往信・訪問診療のクリニック ふるかわ医院  
院長 古河 聡先生
- 2.訪問栄養ケアモデル事業 ～管理栄養士からの事例報告～
- 3.在宅訪問の現状 ～訪問看護ステーションの立場から～  
講師：大阪府訪問看護ステーション協会理事  
訪問看護ステーション帝塚山もも 米原 早苗氏
- 4.介護支援専門員の立場より ～食支援を考える～  
講師：大阪介護支援専門員協会 大浪 雅子氏

## 1.基調講演「これからの在宅医療」

### ～在宅医の立場から～

講師 往信・訪問診療のクリニック

ふるかわ医院 院長 古河 聡先生

これから求められる在宅医療とは、①24時間365日対応 患者は重症度に関わらず医療者といつでも連絡がつく安心感を求めている。中核を担うのは在宅療養支援診療所と24時間対応の訪問看護ステーションになる。医療者(ケアマネも含む)が疲弊しないシステム作りが求められる。②多職種連携 患者の生活は単一の事業所から提供される単一のサービスだけで支えられるのではなく、身体状況や環境などに応じて、様々な地域資源を組み合わせながら支えられるといった複合的な支援を実現するためには、様々な主体や職種間の連携が不可欠である。③その他介護サービスの活用 訪問医療・看護・リハビリなどの居宅での医療系サービスと、デイサービス、デイケア、短期入所などの施設系サービスの連携も非常に重要。介護と医療のニーズを踏まえた上で、各サービスをどのように組み合わせると最善の対応が可能になるかといった視点が必要。

医療と介護の連携を図っていくためには、現場において多職種間で「顔の見える関係」を構築すること。介護職と医療職間で「共通言語の理解」や「コミュニケーション」を進めること。それぞれの専門性と地域包括ケアシステムの中で果たしている役割について相互に理解することが第一歩になる。

在宅で受けられる栄養指導は、介護保険が医療保険より原則的に優先し、ケアプラン外での対応が可能である。

大阪府は在宅医が多く、今後栄養指導も充実してくる可能性が大きい。嚥下障害は高齢者には多少なりあり、訪看、ST、栄養士との連携が増えてくる。

### 〔在宅訪問栄養ケアに求められるポイント〕

口頭だけではなかなか伝わらない、実際調理を見せる。買ってきたものを見せる、曖昧さ「こ

のくらいできたらいいよね」が重要、完璧を求めるのは難しい、「あの人にまた来てほしい」など何か、繰り返しができるやり方が大事である。

(文責 行政 高井美江子)

## 2.訪問栄養ケアモデル事業

### ～管理栄養士からの事例報告～

在宅訪問栄養指導2例の事例報告があった。

## 3.在宅訪問の現状

### ～訪問看護ステーションの立場から～

講師 大阪府訪問看護ステーション協会理事

訪問看護ステーション帝塚山もも

米原 早苗氏

### 〔訪問栄養指導の効果〕

- ・栄養に関する幅広い知識でその人に合わせた指導ができる
- ・栄養状態の改善＝生活の質の改善 ⇒笑顔が増える

### 〔訪問栄養指導への期待〕

- ・管理栄養士と訪問看護師が連携で、継続的な栄養管理が可能となり、患者の状態の変化にすぐに対応ができる

## 4.介護支援専門員の立場より

### ～食支援を考える～

講師 大阪介護支援専門員協会 大浪 雅子氏

介護支援専門員(ケアマネージャー)だけでは食の改善が困難

- ・高齢者の好みや食習慣は長年にわたり形成されたもの
- ・簡単に食生活を変えることは困難
- ・食欲が落ちたり食べる量が減っている時でも、少しでもおいしく食べていただけるように、食べ慣れた食材、調理方法、好みの味付けにして、低栄養にならないように気をつける
- ・ヘルパーさんへの教育  
⇒高齢者本人の理解が必要  
管理栄養士の支援が必要

### 〔管理栄養士に期待すること〕

- ・病院の管理栄養士との連携
- ・管理栄養士から主治医へアプローチ

(文責 病院 吉里慶美)